

「有明の別れ」論

—「とりかへばや物語」との比較を通して—

村上理麻

序

十二世紀中頃から十三世紀初頭にかけて成立したと考えられる物語「有明の別れ」は、「無名草子^{（注）}」に初めて「『有明の別れ』…などは、言葉遣ひなだらかに耳立たしからず、いとよしと思ひて見もてまかるほどに、いと恐ろしきことどもさしまじりて、何事も醒むる心地することそ、いと口惜しけれ」と見える。この「有明の別れ」の中には「男装」、「隠れみの」、「疑死事件」、「天人降下事件」などの様々な珍しい趣向が取り入れられている。その中でも特に特徴的なものは、「男装の姫君」が登場することである。

この「男装」を取り扱った物語でまず思い出されるのは、同じく王朝末期に成立した「とりかへばや」であろう。「とりかへばや」は「有明の別れ」の少し前に成立したと考えられ、今までも影響関係が指摘されてきた。「有明

の別れ」という物語の本質を考える上で、この「とりかへばや」との比較を行うことは、大変重要なことであると思われる。「とりかへばや」には「古とりかへばや」とその改作本である「今とりかへばや」の古今二種の物語が存在したことが知られている。だが「古とりかへばや」は早くに散逸しており、現存しているのは「今とりかへばや」のみである。よって現在において「有明の別れ」と直接比較検討できるのは今本の方だけである。そこでここでは「有明の別れ」と「今とりかへばや」両者の構想、場面描写、文章、語句などを比較し、「有明の別れ」における「今とりかへばや」の影響を明らかにしたいと思う。そして「有明の別れ」の作者がどのように「今とりかへばや」をとらえ、どのように意識して取り込み、自分独自の物語を作り出していったかというを考えてみたいと思う。

なお本文の引用とページ数は全て「有明の別れ」ある男装の姫君の物語」（大槻修訳・注創英社）、「校注と

考えられ、今までも影響関係が指摘されてきた。「有明

りかへばや物語」(鈴木弘道著 笠間書院)によった。

第一章 「今とりかへばや」との比較

第一節 構想の比較

「有明の別れ」と「今とりかへばや」の影響関係を考えるために、まず構想上の主な類似点を考えてみる。原田明美氏による詳しい指摘があるのでそれをもとにし、また中村氏の指摘^(註)や自分の意見を加えながら次のようにまとめてみた。(なお、以降は「今とりかへばや」を「とりかへばや」と記し、「有明の別れ」と「とりかへばや」の女主人公をそれぞれ「女大將(女院)」・「女中納言」とする)

一 女主人公の男装

二 女主人公の人柄(男の楽器である笛に優れている・生真面目な性格で、不思議なほど身を慎む)

三 契らぬ妻(有明の別れ―対の上 とりかへばや―四の君)を持つ女主人公

四 妻の密通により我が子ならぬ子をもつ女主人公

五 男(有明の別れ―帝 とりかへばや―宰相中將)から

男装を見破られて契りを交わす女主人公

六 男として女性(有明の別れ―承香殿の女房 とりかへ

ばや―麗景殿の女御の妹君)と歌を交わす女主人公

七 女装に戻ったあと、入内して皇太子を産む女主人公

男装の姫君の物語―」(大槻修 訳・注 創英社)、「校注と

以上、七項目に及ぶ類似点がみられる。構想の上ではかなりの類似点があると言えよう。この類似点を考えてみると「有明の別れ」の女大將と「とりかへばや」の女中納言は、男として育ち、契らぬ妻との結婚、失踪(死亡)、入内、立后という一生の大まかな構成が大変似ており、女大將には女中納言が大きく影響していると思われる。しかし、ここで注意したいのが、この類似した構想の中にも二つの作品において異なった部分が見られることである。

一について「とりかへばや」では女装をして尚侍となっていた兄弟の存在があり、女中納言は後に男装から女装へ戻る際にこの兄弟と入替わる。ところが「有明の別れ」では兄弟は存在せず、女大將は一人で右大將から事前に設定されていた幻の妹君になりすまし、右大將は死去したとして無事入内を果す。まことに巧妙な「一人二役早変わり^(註)」が行われるわけである。ここで、なぜ兄弟の存在を省き、より複雑な方法に変えたのかという疑問がある。これは「有明の別れ」の作者が、女の方に焦点を絞った物語を書こうとしていたからではないだろうか。

古本から今本への改作の際に「とりかへばや」をへ女の物語」として方向づけようという構想があったことが考えられる。「今本作者は女中納言に焦点を定めて、物語を展開させる道を選んだのであるが、その男装を解くための便

宜その他から女装の兄男尚侍をそのまま利用することにしたのだ^(五)。つまりそこには構想と作品としての描かれ方との間にギャップが生じていたのである。「有明の別れ」はこの問題を女主人公の一人二役の早変わりで解消し得たといえよう。

また三においては、女である大将をそれとは知らずして夫に持ち、夫以外の男との密通によって子を産むという対の上は「とりかへばや」の四の君からの影響がみられる。しかしその「まことならぬ」夫婦仲はかなり様子が異なっている。まず、女中納言と四の君との結婚は周囲から薦められた形式的なものであり、愛情もそれほど深くはなかった。後に四の君は宰相中将との密通事件を起こし、それから後は宰相中将の方へ心がなびいていく。そして四の君は最後まで自分の夫が女であったことも、その女中納言が兄と入れ代わったことも気が付かないままなのである。それに対して「有明の別れ」の女大将が対の上を妻として自分の屋敷へ連れて来たのは自分の意志で、義理の父親との密通に苦しんでいる対の上の身の上に同性として深い同情をよせたからであった。「ありしよりけになつかしくあはれにぞたのみかはしたまへる」(九八)と、女大将と対の上との夫婦仲には深い愛情があった。それは女大将が表向き死去したと公表された時の対の上の姿にも現われている。

対の上は、物語全体を通して「おほどかにあえかなる御心のくせ」(一八八)というようにおっとりした性格の女性として描かれているが、夫である女大将が死んだときは、自ら尼となってしまふ強さを見せ、それから後は密通の相手の三位中将とも関係せず、子供達の養育に専念するのである。そして後に女院となった女大将と再会し、女院がかつての夫であったことを知らされる。二人の関係は、愛情を友情に変えて続いて行くのである。対の上の立場も女大将の正妻であり、その娘と息子は中宮と左大臣になる。この描かれ方は、後に男大将(女中納言の兄)の正妻になれなかつた四の君と対照的である。

六については女大将が男として承香殿で歌を交わした女房の構想は、「とりかへばや」で女中納言麗景殿のわたりで歌を交わして語らつた麗景殿の女御の妹君との関係を踏襲したものであろう。しかし、この承香殿の女房と麗景殿の妹君は最後の身の上が全く異なっている。「とりかへばや」の方は女御の妹君は、女中納言が兄尚侍と入れ替わつた後にその兄と本当の契りを結びその女兒を生む。そして物語の最後にはそれなりに幸福な結末を迎える。それに対して「有明の別れ」の承香殿の女房は大将が死去したと公表されたあと、世をはかなみ出家して尼となり、後には悲劇的な最後を迎える。主人公との関係において類似した設

死去したと公表された時の対の上の姿にも現われている。

定の人物としてはあまりに対照的ではないだろうか。

「とりかへばや」は最後はほとんどの人が幸せになったといういわば大団円で終わっている。「古代の物語の結末には、しばしばこうした、内容のない、ひたすら目出度し目出度しの結末だけを強調する形式だけの記述がある」。「とりかへばや」は「まさに古代物語の典型といつてよい結構を有する」のである。これに対して「有明の別れ」はあえて承香殿の女房の最後を悲劇的に演出し、宿命に翻弄される人間の姿という主題を表現したのである。

第二節 場面描写の比較

次に場面描写においての「有明の別れ」と「とりかへばや」の類似点を、それぞれの引用文によって対比する。この点については、原田氏が詳しくあげておられる。その場面は省略し、そのほかに新たに発見した類似していると思われる場面をあげる。

一 我が身の異常さを思い悩む女主人公

「有明の別れ」

知れぬ御心は、世とともに世
づかぬ身のもてなしをのみ、
「いかにしてことぞ」と思ひな
やまれて…(四四)

「とりかへばや」

なだてめづらかに人にたがひ
ける身にかと、うちひとりこた
れつつ…(一四)
あはれわが心ひとつこそ人にた
がへる身と嘆かしさの絶ゆる時
なけれ(一〇四)

劇的な最後を迎える。主人公との関係において類似した設

・両方の女主人公ともに自分の身の上を世間一般ではないと自覚しているところが共通している。

二 ちぎらぬ妻の密通事件

世のつねならずたをやぎすぎ
たる御けはひに、ひさしくしみ
かへりては、いとおそろしく
はづかしきに、一言葉の御いら
へだにえのたまひいでず。

例の御身はなれぬ侍従たどりき
たり。「まづ、この君なりけり」
と思ふに：たれもいみじく思ひ
まどひて、ただおしいづといふ
ばかりにさわがしきこゆるにせ
んかたなくて、いみじき雨にし
をれいでたまひぬ。(二二八)

・どちらも女であり優しく語るだけの夫に慣れていた妻が、侵入してきた男に脅える様子、密通場面を乳母子の女房一人が気づき、そのことが外に漏れないように働く所などが類似している。

三 男から男装を見破られ、契りを交わす女主人公

なほけちかくてはさらにいは
んかたなくこまやかにうつしげ
なるを…さこそいえど、いとす
くやかにもてはなれやすき御身
のほどを、もとより人のとあり

女君は、中納言にならひて、
人はただのどやかに、恥づかし
うち語らふ事よりほかにいな
きもの」とのみおぼすに…(三
五)

前近き御乳母子の左衛門とい
ふ聞きつけて…「その人なりけ
り」と聞くも、あさましういみ
じけれど…左衛門いられわぶれ
ば、いでぬべき心地もせねど、
さりとしてあるべきならねば、泣
く泣く心のかぎりのめ契りて、
出たまふ心地夢のやうなり。
(三五)

すくよかにおしはなちてみる
めでたきは、ものにもあらざり
けり。
さはいへど、けししくもてなし、
すくよかなる見る目こそ男なれ、

かかりをえおぼしわかず(一四〇)

せんかたなくわびしく、「つひにいかなることいのでこむ」としづ心なくかなしきに、涙もつづきこぼれつつ、いみじう思ひまどひたまへるさま……

さこそかぎりなくすくやぎ(ママ)たまへど、かくあさましきには、なにの心づよきにかならはん。(一四二)

・この場面は女主人公が、いつもは男として気丈にふるまっ
てはいるものの意外な出来事に対処できず、本来の女性的
な心理に戻ってしまった様子が共通しているように思う。
また中村氏は「有明の別れ」のこの場面について、「宮幸
相が女中納言の正體を知って挑むといふ『とりかへばや』
の構想もまじっていよう(註9)」と述べられている。

四男からの文を断る女主人公

かくみだれがはしきかしこまりも、おのづからかけとどめ待らば、ことさらにまゐりてなん。(一五八)

なほあはれともおぼしめさばかくかたはなる人めをつつませたまへ(一六〇)

とりこめたてられては、せん方なく、心よわきに、こはいかにしつる事ぞと、人わろく、涙さえおつるに(八二二)

昼より乱り心地くるしうてえ対面たまはらぬ。かしこまりはことさらにまゐりてなん。…人目のいと例なきやうなるを同じ心にあひおぼはして、人目くるしからず、もてなしたまはばなん、まことに深き御心とは知るべき(八三三)

・初めて契りを交した後にその相手から来た歌を断る場面である。人目も気にせず文を送る男の態度に比べ、女大将も女中納言も冷静に対処し、「人目」を謹むようにと言いつ返すなどしつかりした性格がうかがえる。

以上、両者の場面描写の類似点をいくつかあげてみた。原田氏があげておられる十七箇所にもおよぶ類似した場面とあわせて考えてみると、場面設定において「有明の別れ」の作者が「とりかへばや」を参考の一つにしたことは間違いないと思われるのである。

第三節 文章・語句の比較

次に、文章や語句についての類似点を比較してみる。これについても原田氏が十二項目あげておられる(註10)ので、ここではそのほかに発見した類似していると思われる文章をあげてみたいとおもう。

「有明の別れ」

- ① 妹の姫君も山口しるういとうつくしげにおひいでたまへる(二二〇)
- ② 「なほ、琴は女の手まじりてこそ、あやしくあはれそふものなれ(二三六)

「とりかへばや」

- ① これやさは入りてしげきは道ならん山口しるくまどはるゝかな(一八)
- ② 中納言は琴の音のみ心にかかりて「かかるとやうなる夜は、女の交じりたるこそをかしけれ」(二三七)
- ③ かゝる女のあらましかば(一八)

かゝる女のまたあらん時、わ
がいかばかり心をつくしまどは
ん(八一)

④むすぶ神の契り(九七)

⑤桂の袖に、八尺あまりたらん
髪よりも、うつくしげにぞ見ゆ
る(一九五)

⑥よそに御覽じつるよりも、ち
かまさりはこよなくおぼされて
(二〇八)

⑦妻戸かけなどして、「あやし
く人氣のするこそ、むくつけけ
れ」(二〇八)

④産霊の神の心むけは(五六)
⑤九尺の髪のうちやられたらん
にはすぎて、あてにめでたくぞ
御覽じなさる。(一四八)
⑥よそにうち御覽せしはことの
かずならざりけり。(一八〇)

⑦御格子はささせたまへるか。
あやしく人のけはひする心地こ
そすれ(三五四)

中村氏は、①を引用している「とりかへばや」の歌を
「引歌としていゝのではなからうか^{註四}」、「②を『とりか
へばや』の本文と若干の関係があらう^{註五}」と述べておら
れる。

以上見てきたように、構想の上においても場面描写、文
章・語句の上においてもかなりの類似点があり、「有明の別
れ」が「今とりかへばや」から甚大な影響をうけていると
いうことが分かる。古本からの直接の影響も考えられるし、
他の先行物語との比較も行っていない以上、この比較の結
果は推測の範囲を出ないところもあるが、しかしそれらを
考慮しても「有明の別れ」の作者が「今とりかへばや」を
読み、色々な構想や趣向をそこから取り入れたことは明ら

かであろう。そして、ただ構想や趣向をまねるだけではな
く、独自の構想や考えを作品の中に盛り込んでいったこと
もうかがえるのである。では「有明の別れ」の作者は、
「とりかへばや」のどのような点に影響を受け、どんな意
識で自分の作品に取り込んでいったのだろうか。

「有明の別れ」の物語の構想は巻一の第一部と巻二、三
の第二部とに分けることができる。この第一部は女大將が
主人公で、男装をして活躍した後女装に戻り女御として入
内し皇子を出産、立后のあと女院に昇るまでの話である。

巻二以降の第二部ではその女院の表面上の甥である左大臣
が主人公となる。だがこれまでに挙げた類似点を見てみる
と、そのほとんどが女大將が主人公である巻一に集中して
いることが分かる。また第一節でも述べたように物語の構
成においても両者の女主人公に多くの共通点が見られる。

つまり「とりかへばや」からの影響の多くは、女主人公の
造形にかかわる問題であると言えよう。原田氏は「有明の
別れ」に見える「とりかへばや」の影響について、「ともに
に『男装』という奇想を趣向の一つとして取り組んだ以上、
物語展開の上で、宿命的ともいふべき類似性の保持に及ん
だケースも考えられよう^{註六}」と述べておられる。だがは
たして両者の類似性が男装という共通の趣向だけで説明で
きるのだろうか。「有明の別れ」の作者はもっと「今とり

かへばや」という作品を意識して取り込み、それを越えた自分独自の物語を創ろうという超克の試みがあったように思うのである。そこで第二章ではどのような意識で独自の物語をつくらうとしていたのか、第一章で示した構想の類似点と相違点を手がかりとして、特に共通点の多い女主人公とその人間関係を中心に考えていこうと思う。

第二章 「とりかへばや」の受容

第一節 対の上と四の君

この二人は、同じような立場にある人物でありながら、性格の描かれ方にもかなりの差が見られる。

「とりかへばや」で四の君は、宰相中将との密通後しだいに中将にひかれていく姿が描かれている。その性格は、周りからは「子めかしからむ」といわれ表面は幼く見えながら、その心の中には密通を夫に知られながら宰相中将との交際を続けるほどの情熱をもっているのである。この四の君は、その夫を裏切るという行動からか「無名草子^{（註1）}」においても「四の君ぞ、これは憎き」と評されている。古本では、「あらまほしくよき人」といわれた四の君が今本ではこのように反対の性格づけをされたのは、今本の作者の改作意図に理由があったと考えられる。「今とりかへばや」においては、宰相の中将を間におきながら、情に流さ

れない知的な女性としての女中納言と感情で動いてしまう女性としての四の君を対照的に描くことによって、女中納言の自立した性格を明確にしようとしたのである。

一方対の上は、これとは逆に素晴らしい女性として描かれている。第一章でも述べたように、女大将との夫婦関係も良好であった。性格も「いとせめてうつくしき御心のくせ」（一八八）と、その美貌とともに高く評価されている。そのような対の上の性格は、やはり女主人公である女中納言と対比するためだったと考える。対の上は「もとよりたどたどしき御くせはなにをなにともわかれたまふまじ」（一八六）などたよりない性格として描かれており、自意識が弱いはかなげな女性である。それに対して女大将は強い自我を持った男勝りの性格である。この対照的な二人の女性には巻二以降、女院の表面上の甥であり対の上の息子である左大臣により比較される。そして左大臣はこの二人の女性を理想の女性として考え、しかも「またたぐひきこえさせたる人のありがたきこそ、くちをしけれ」（二二六）といて女院の方により高い評価を下し、女院を恋い慕うのである。そして、右・内大臣のそれぞれの美しい娘を妻としながら、最後までこの女院にならぶほどの女性を見いだせずにおわる我が身の不運を嘆き、第二部ではその苦惱が中心に描かれているのである。たよりなく女らしい対の上

や」においては、宰相の中将を間におきながら、情に流され、男として生きていた女院と、どちらが「有明の別れ」の作者の理想の女性像であったかは、左大臣の評価から明らかであろう。つまり女院という男装の経験を活かして誇り高く生きる女性の魅力を際立たせるために、対の上を女らしい女性として描いたのではないだろうかと思うのである。

第二節 帝と宰相中将

女大将と女中納言は、どちらも男から男色をしかけられその結果男装を見破られることは同じである。しかしその相手の身分には大きな違いがある。「とりかへばや」で女中納言が男装を見破られるのは同僚の宰相中将であるのに対して、「有明の別れ」の女大将は時の帝である。この初めて契る男性の違いが女大将と女中納言が入内して後の帝との関係の差となって現れる。「とりかへばや」では帝は尚侍となった女中納言を寵愛するが、彼女が処女ではなかったことをいぶかしく思い、失望する。一方「有明の別れ」の方は、帝の女主人公への寵愛は「とりかへばや」以上である。それは帝が女主人公の男装のころを知っており、しかもその秘密を暴いたのは帝自身だからである。「世とともにこのもしきものに思ひそめたまひにしが、御目とまることおほかるべし」(一八〇)。つまり帝は男装時代も含めて女院を愛したのであり、二人で女院が女大将であったころのことを懐かしむほどの仲なのである。しかも帝は

が中心に描かれているのである。たよりなく女らしい女院の男装時代を正当に評価し、女大将に匹敵する才能のある人物が現在にいないことを残念に思うのである。これは男装時代の女中納言を「あはむる」宰相中将の姿勢とは違っている。宰相中将は女装に戻った女中納言に対して彼女の男装を「わが身をあらぬにかへてすぐしたまへること、あるべきことならず」(一一八)と非難する。また両女主人公の最終的な身分も違っている。「とりかへばや」で女中納言は尚侍として出仕し、帝と契った後に女御になり立后して国母の地位につくが、「有明の別れ」の方では女大将は女御として華々しく入内する。そして中宮に立后し、女院の地位まで得ている。

「とりかへばや」では、後に帝は中宮となった女中納言と関係があつた相手が宰相中将であり、宰相中将の息子が中宮の子供であることを知る。しかし、帝が知るのはそこまでで、彼女が元の中納言であることには全く気が付かない。そして最後まで女中納言の秘密は守られたまま物語は終わっている。中宮の幸福のために、帝はそれ以上の事実を知ろうとはしなかったのである。ここには「知ることの抑制^(正)」が働いていると言う。物語を円滑に進め終わらせるためにこの「知ることの抑制」が「とりかへばや」では、帝だけでなく色々な人物や場面に認められる。四の君は最後まで夫の中納言が女であつたことを知らずに終わり、

「無名草子^註」で「いみじく心劣りすれ」と非難される。宰相中将と女中納言の息子も、後に殿上して中宮となった女中納言と再会し、彼女が自分の母であることに気付くが、それを父親の宰相中将や乳母にすら語らないのである。「とりかへばや」では秘密を知っているものたちが皆口をつぐみ、秘密は守られ、そのために皆が幸せになるという結末になっているのである。これに対して「有明の別れ」では帝をはじめ対の上も女院がかつての右大将であることを知る。また三位中将は自分と対の上との密通によって生まれた娘が中宮になっていることを知り、中宮も自分の本当の父親が三位中将であることを知る。自分は故右大将（現在の女院）と対の上の娘であると信じていた中宮は、知らなければよかったと嘆き、それを知らせた侍従も後悔に苦しむのである。これは「とりかへばや」が避けた、知ることにより不幸になる場合を描いたのではないだろうか。それは作品の最後の場面においても言えることである。女院をかつての右大将であった人とは知らず、叔母であると思ひ禁断の恋に悩む左大臣。事の全てを知っている侍従が、その左大臣に全てを語ろうとする場面で物語は終わっている。これより後は物語が書かれていないのか、それとも散逸してしまったのかはまだ分からない。しかし作者のそれまでの創作態度から考えると、作者は左大臣に真相を告げ

る物語を用意していたのではないだろうか。そこから生まれる左大臣と女院の新たな苦悩、それはこの物語の続きにふさわしいもののように思われるのである。そしてこれは「とりかへばや」の古代物語の形式どおりの結末に比べても、より現実的でしかも発展性のある結末であるといえるのではないだろうか。

第三節 女大将と女中納言

最後に両者の女主人公の描かれ方の違いについて考える。二つの物語の女主人公が最も異なるのは、女装、つまり本来の姿にもどった後の態度であろう。「とりかへばや」の女中納言は宰相中将と契りを結んだ後妊娠し失踪する。そして宇治で女の姿に戻った後は「いとありつき女さまになりはてて、…今やわが身かくてあるべきぞかしと思ひ知り、なよなよともてなしたるはありし人とおぼえず」（一四）と全く女性らしい態度をとるようになり、すぐに男装時代を諦めてしまうのである。入内した後にも女中納言が思ひだして嘆くのはほとんどが宇治に残してきたわが子のことだけなのである。その姿は中納言として活躍していた男装のころと比べると「どこか抜け殻のようで生気に乏しく^注」、国母となったその最後も形式的な幸福を描いたもののように思える。これに対して「有明の別れ」の女大将は入内した後も、「あはれにこひしく思ひいでられたまふ

までの創作態度から考えると、作者は左大臣に真相を告げ

ふしのみおほかり」(一七八)「すぎしかたこひしきに：つくづくとうち泣かれたまふことおほかり」(一九〇)「あさまなりし御身のこひしくおほしいでらるる」(一九二)「雪つもる王のうてなはかはらねど、なれしわが身のかげぞこひしき」(一九四)など、男装時代を「こひしく」思い女の身に落ち着くことができないのである。さらに「とりかへばや」の女中納言が得た「国母」の地位の上に「女院」の称号まで得ながら男装時代を懐かしみ、またかつての自分に匹敵する才能を持った人物がいなことを残念に思い、「げに御身をわけたらば、いづかたにもいみじきものはえならましとぞくちおしき」(一九二)とまで思うのである。女大將は「人間として生きたしたたかな自己主張の度合いは、『とりかへばや』の女主人公よりも一段と進んでいる^(註17)。自分が持つ可能性についても、より深い理解があつたのではないだろうか。そしてこの二人の女主人公の違いが、両作品の作者の女性に対する意識の違いも表しているように思われるのである。このように、「有明の別れ」では、同じ男装の姫君の女心の遍歴を描いた「とりかへばや」よりも一層深い女性の可能性にたいする追求がなされているように思う。辛島氏は、五十嵐氏がかつて「今とりかへばや」を「婦女子の如き文武の男子と、思ひあがつた才媛とが似而非風雅と愛欲とに日を送った当

は入内した後も、一あはれにこひしく思ひしてらオたまふ

代の影とすれば、また時代自らの描いた一種の劇画と見ることが出来るであらう。」と述べたのに対し、これには「直感的に『今とりかへばや』に内在するフェミニズム的傾斜を臭ぎとって、生理的に排斥しようとした気配が感じられる。しかし、逆にいえば、半世紀以上に既に五十嵐はこの物語の本領が透けて見えていたともいえるだろう^(註18)」と述べておられる。「有明の別れ」の作者もまた「とりかへばや」に内在する「フェミニズム的傾斜」を無意識にかみ取っていたのではないだろうか。そして「今とりかへばや」では不完全で終わった「誇り高く自らを偽らずに生きる女」の創造を、自分の物語の中で試みたのではないだろうか。そのため「男装」をはじめ、「無名草子」では非難されるような様々な趣向をあえて取り入れ、自分独自の美的世界を創り出し、その中で自分が理想とする女性の生き方を描こうとしたのであると考える。

「女主人公が男に伍して彼等を凌駕するには男装が必要であつた^(註19)。」「有明の別れ」の作者が「とりかへばや」から「男装の女性」という趣向を取り入れた理由は、まさにこの点にあつたと思われる。そしてその趣向と同時に「女性の可能性」というテーマをも受け継ぎ、しかもそれをより発展させた物語を創り得たといえるのではないだろうか。

結び

以上、「有明の別れ」という物語について、「とりかへばや」との比較を中心に考察してみた。その結果、その構想、場面描写、文章・語句などに類似点を数多く発見し、「有明の別れ」が現存の「今とりかへばや」から多大な影響を受けていることがわかった。そしてそれは「有明の別れ」の作者が単に「とりかへばや」の「男装」という趣向だけに興味を持ち取り込んだというだけではなく、そこには「とりかへばや」という物語を越えようという意識があったからであると考えられる。

「有明の別れ」の作者は「とりかへばや」の「男装」という趣向そのものよりも、女中納言の姿に、女主人公にふさわしい魅力を感じたのであろう。だが「とりかへばや」では、女を中心とした物語にすることも、また女性の可能性の追求という試みも不完全であった。そして主題として女中納言の苦悩する姿、心の遍歴を追いながら、宿命という主題も単なる「時代化粧（注2）」として描かれただけで終わっている。辛島氏は、女中納言について「男装を断念して女に戻ることは、一つの挫折であった」と述べ、その不満は「もしや国母の栄光を極めることで解消されるものなのか―熱心な読者は、ひよっとするとこんなだいたいそれた疑

問に出会ってしまいそうだ（注3）と述べられているが、この「有明の別れ」の作者は、まさしくその「熱心な読者」であったのではないだろうか。「有明の別れ」の作者は、男装の女主人公をより魅力的に描き、地位を高めることによって、この疑問に答えたと考えるのである。そして同時に、宿命に翻弄されながらも強く生きる人間の姿を、自分独自の美的世界の中で描くことを目指したのではないだろうか。そしてそのような作者の態度が、特異な趣向を数多く含みながら、しかもいたずらに猟奇趣味に落ちることのない、文学的価値を保ち続ける「有明の別れ」という作品を作り得たといえよう。

《注》

注1 桑原博史 校注「無名草子」昭和五一・一二（新潮日本古典集成）新潮社

注2 原田明美「有明の別れ」と「とりかへばや」大槻修訳・注（「有明の別れ―ある男装の姫君の物語―」一九七九・三 創英社）

注3 中村忠行「解題（二）―先行物語との関係を中心として―」（中村忠行・曾沢太吉共校「有明乃別」上 昭和三三・五 古典文庫刊）

注4 大槻修訳・注「有明の別れ―ある男装の姫君の物

のか―熱心な読者は、ひよっとするとこんなだいでそれた疑

注 4 大槻修訳・注「有明けの別れ―ある男装の姫君の物

語」一九七九・三(対訳日本古典新書)創英社

注 20 注 6 参照

注 5 辛島正雄『「今とりかへばや」序説―古本からの飛

注 21 注 7 参照

翔―(徳島大学教養部紀要二三 一九八八・一)

注 6 今井源衛・三谷栄一「堤中納言物語・とりかへばや

物語」(鑑賞日本古典文学一二)角川書店 一七九

四

注 7 辛島正雄「今とりかへばやの定位」(「堤中納言物

語・とりかへばや物語」一九九二・三新日本古典

文学大系二六)岩波書店

注 8 注 2 参照

注 9 注 3 参照

注 10 注 2 参照

注 11 注 3 参照

注 12 注 2 参照

注 13 注 1 参照

注 14 河合隼雄「とりかへばや、男と女」新潮社 一九九

一・一

注 15 注 1 参照

注 16 注 7 参照

注 17 注 7 参照

注 18 注 7 参照

注 19 注 7 参照